「大阪自然史フェスティバル２０２２」に参加して（報告）

報告　米道　綱夫
写真　垣井　清澄

■日　　時　2022 年 11 月 19 日」（土）～20 日（日）
■場　　所　大阪市立自然史博物館（長居公園内）
■スタッフ　19 日；野口・垣井・山本・米道　20 日；岸田・野口・垣井・米道

大阪自然史フェスティバルはコロナ禍のため 2 年間開催できなかった。今年は 3 年ぶりの開催になった。2 年間のブランクがあったにもかかわらずほぼ 3 年前と同様の規模で開催できたのは自然に関して活動している団体の熱意が持続していたし、参加団体の発表したい活動や存在していることを知ってもらうことを渇望していたに他ならない。また市民が開催する自然史フェスティバルの資金集めにオリジナルの返礼品付きの寄付金を募集したことも新しい取り組みだった。目標額 140 万円に対し、109 万円集まっているという。
また寄付金も 5000/10000/30000/50000 円と定額にして寄付を集めやすいようにしている。19 日の来場者数は 9100 人、20 日は雨にもかかわらず 8200 人の来場があった。

さて我々守る会のブースでは会の活動紹介やツバメのねぐら入りの変遷のポスター展示、ツバメのねぐら入りのビデオ上映、クラフトづくり（ナラガシワの殻斗で芋虫作り、桜の木の枝で鉛筆作りなどの工作の指導をした。
工作をやりにくるのは幼稚園から小学生高学年までで熱心に工作に取り組んでいた。男の子も女の子もほぼ同じくらいの割合で来ていた。ナイフを持つのが初めての子もいたが、それなりに見本を見ながら自分の満足のいく芋虫や鉛筆を作っていた。このクラフトコーナーは大変人気があり、人が絶えることはなかった。材料も 19 日に出尽くしてしまった。20 日は材料を補充したが午後 1 時ごろにはほとんどなくなってしまうほど盛況だった。子供達が作った作品は垣井さんが写真に収めた。皆さんの中には本会のフェイスブックで作品群を見られた方もいると思う。

ツバメのねぐらの変遷は興味を持つ人が多く、多くの人は 1994 年からのねぐら入り場所の変遷記録に興味を持たれた。堺市美原区の池の大きさやツバメの数を聞いてくる人もいた。高槻でツバメのねぐら入りの調査をされている方は是非展示資料が欲しいと言ってきたのでメールで送った。会場で思うことはあの団体の人はどうしているかなとか、顔が見えなかったらどっか悪いのではないかと思うことである。お互いが元気で活動できていることを嬉しく思い、また新たに知り合えた人ができたことに感謝している。自然史フェスティバルは自然派市民の文化祭であり今後とも続いてほしいし、新たな出会いがあることに期待している。

2022 年 11 月 19 日の作品

2022 年 11 月 20 日の作品